Shinshu University Institutional Repository SOAR-IR

意味を考へていく上での諸面

著者	佐藤 茂
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 2: 15-26(1983)
発行年月日	1983-04-17
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022357

(C) 1983 the Author.

意味を考へていく上での諸面

佐　藤　　茂

発表の題目はこんな風にいたしたのですが、この<諸面>は<一面>位のところにならうかと存じますので、そのことをはじめにお断りしておきます。

国語学会の機関誌『国語学』第130集に、山田忠雄述『近代国語辞書の歩み——その模倣と創意と——上下』2冊についての書評をかかげました。書評とは申しますが、この2冊は中々の大著でございまして、1冊が約千頁ありまして、2冊で2千頁近く、刊行は昨年（昭和56年）の7月、三省堂からでした。書評を国語学会の『国語学』編集委員会から頼まれたわけです。山田は、旧制高校（二高）で机を並べた同級生、友達ですから、このご依頼を断ることもできません。

本年（昭和57年）の1月から6月までの半年間、その2千頁の本を3度か4度は読んだつもりです。それについて、きちっと書かうとなりますと、やはり2千頁位か、更に詳しく批評するとなりますと、5千頁位になるかもしれませんので、10年か20年たたないと、本当の書評は書けないと思ひましたので、一寸した感想を頼まれた枚数だけしるした次第です。

この山田君の本は皆さんがよくご存知だと思ひますので、内容についはて一々申しませんが、この本を読んでゐますと、到るところに<語釈>といふことばが、何十回か何百回か出てきます。この<語釈>といふのは、辞書などでいひますと、文字通り<語（見出し語）>の<釈（説明・解説……）>ですが、そのことは何も辞書に限ったことではありません。山田君のこの本の中に「非辞書体は辞書体にまさる」の名言があります。この<非辞書体>は文字通り辞書ではありませんが、内容的には辞書にまさるものである。それが<語釈>においてしかりです。そのことは特に上巻の方に出てゐます。

その<語釈>の<釈>といふのが、本日の題目としました<意味>と直結すると考へてゐます。また<釈>といふことばは、すでに古く中国の『爾雅』に見えます。『爾雅』には、釈詁・釈言・釈訓・釈親・釈宮・釈器・釈楽・釈天・釈地・釈丘・釈山・釈水・釈草・釈木・釈蟲・釈魚・釈獣・釈蓄が示されてます。

かうした<釈>の使ひ方は大変重要です。また同時にこれは一種の意味分類とうけとることができます。したがって、これからあとの中国の類書の数々、日本での『新撰字鏡』『和名抄』以来の分類体辞書、更に英語の方では Roget の Thesaurus のやうなものとすべてにおいて関係が深いことになります。今、それらの歴史・沿革については、とても申しあげきれませんが、<意味>といふことを考へますときには、まっさきに『爾雅』を思ひ出すわけです。

つい二三日前のＮＨＫの教育テレビでの「日本語をさぐる」とかの番組で諸橋さんのこ

とを取りあげてました。藤堂明保さん・中村元さん、あと京大人文研の方（お名前を一寸失念しましたが）の３人の座談・鼎談会といふところでせうか。諸橋さんは99歳、白寿といふお年でおなくなりになったわけですが、その諸橋さんの一生の仕事であった『大漢和辞典』についてのことが当然中心でした。この番組で大変感心しましたのは、『大漢和辞典』をほめたたへるといふことよりも、この辞典の不備な点が主体だったことです。

わたしも『大漢和辞典』を愛用する方ですが、何か用例を調べるときにはよく『佩文韻府』とか『龍龕手鑑』を引くわけです。このことは先日も別のことでふれたことがあります（「センタクとセンダク――ＬＡＪ160図についての別の見方――」――日本方言研究会第35回研究発表会発表原稿集55頁）。『佩文韻府』で調べたあとに『大漢和辞典』を見ますと、『佩文韻府』のまま『大漢和辞典』にのってゐることがよくあります。このことはよく取りあげられ、問題とされるわけです。先日の座談会でも『大漢和辞典』は『佩文韻府』をよりどころとしたといふ話がありました。

それはそれとしても、中国古来のものと別に漢訳仏典があるわけです。その漢訳仏典にあげられてゐる語、それのあげ方・説明が『大漢和辞典』においては、徹底的に不備であることもあげられました。道教関係の不備はもっと甚しいといふことも痛烈にとりあげられました。

漢訳仏典ができてきますと、それの「音義」が作られていきます。一切経音義・華厳経音義など申すまでもありません。漢訳仏典に用ゐられた語のよみ、音ですね。それとその意味、義といふわけです。

慧琳の一切経音義などよく知られてをり、日本では小川本華厳音義のやうに和名の付されたものもあります。

また、後藤朝太郎さん以来といふわけではありませんが、漢字の形音義といふことがいはれてきました。この＜義＞も意味に通ずるものです。

また、戦前の旧制中学とか、旧制高校では、国語の時間といふと＜解釈＞が中心でした。よく＜読んで解釈＞といふことがいはれました。＜解釈＞といふいひ方は随分古くさく聞えますが、現在でも常に新しい問題ではないかと思ひます。その＜解釈＞を「意味」とおきかへましたならば、「意味」をとるといふことは、本当にできるのだらうかといふことにもなります。

今わたしたちの手もとにある辞書を引いてみますと、どの辞書にも一通りのことはかいてありますので、「意味」といふことをなんとなくeasyに考へてゐはしないかと思ひます。

そこで、時間のあります範囲内で、こんなことを思ってゐるといふことをお話いたさうと考へてゐます。

以上が前おきでございます。

1　intonationと「意味」

大分前のことですが、国家公務員の会館が虎の門にありました。今は竹橋です。ただしそのとなりが丸紅といふのが気になるところです。虎の門のころ、よく相部屋になることがありました。たまたま京大の渡辺実さんと一緒になったことがあります。渡辺君は『国語構文論』といった堂々の陣を張ってゐる方です。２人で「やあやあ」などと話してをりましたが、３人部屋なのでもう１人見えるわけです。夕方彼とあと誰が来るかなあなどと話しあってゐましたら、もう１人の相手が入ってきました。

「オバンデス」といって入ってきました。そのひとことを聞いて、わたしはすぐ「あなたは盛岡ですね」って言ったわけです。さうしたら、その方はびっくりしましたし、渡辺君も「どうしてそんなことが分りますか」といひます。わたしは「いや、わたしは盛岡へは一度か二度しか行ったことがないから分りませんが、どうしてもそのいひ方が盛岡なんですよ」と申しました。

わたしの郷里の仙台でも、オバンデスと言ひますし、福島のあたりでも言ふでせうね。ただ、このときの言ひ方は盛岡なんですね。そのときのことばの意味といふのは、オバンとかデスとかといふ、一つ一つのことばではなくて、オバンデスといふ、そのときの言ひ方、いはばそのときの表現全体の中にあるのではないかと思ひました。

わたしたちの従ってをります言語学とか国語学といふ方面では、研究部門で申しますと、音韻、語彙・語法といふことがあります。三位一体とでもいひませうか。どなたも、この３部門について説かれてゐると思ひます。

わたしも学生たちに、その面からの話をしてをります。

それぞれの部門の中の詳しいこととなりますと、いくらでも細かくなっていきます。それが細かくなっていけばいくほど、段々ことばの違ひとか、ことばとは何だといったことが分らなくなってしまひます。

わたしは今１週に１回、火曜日に福井医科大学に漫談に行ってをりまして、お医者さんの友達が何人かをります。ある友達が、お医者さんの卵の頃に、ご婦人のおなかの皮を１枚１枚はいでいくわけですね。それが何十枚にも何百枚にもはげるさうです。ほっぺたなどもさうらしいですが。50枚、100枚、位のうちはまだ皮をはいでゐるといふ気なさうですが、あとは深山幽谷にでも入ったやうになってしまふ。「猟師山に入りて山を見ず」のやうな状態になって、「一体おれは何をやってゐるのだらう」と思ふことがあったと、その友人に聞いたことがあります。どこかわたしたちのことばの研究に似てゐるんですね。

細かなことになりますと、ここは舌が一寸さわってるとか、反り舌になってゐるとかないとか、それは歯ぐきのもう一寸こっちだとか、色々ありますね。さういふやり方は駄目だと誤解されては困りますが、たださうしたことにあまり熱中すると、時々全体を忘れて

しまひます。

歯ぐきも歯裏もなければ、ことばの発声はできませんが、歯ぐき・歯裏、更に舌・咽頭・喉頭など、それらによる発声で<表現>といふことにつながります。したがって、わたしたちは、発声の細かいこととともに、表現全体といふことを時々考へなければいけないのぢゃないかと思ひます。

「意味」につきましても、一字一句の意味は勿論大事で、一字一句が分らなければ、全体は分りませんが、一字一句の意味は分るが、全体がはっきりしないのでは困ります。このごろのことばでいへばマクロと言ふんでせうか。さうしたマクロのことが大事だと思ひます。

またアセクントのことにいたしましても、たとえば本日も木曽・開田村の録音をおききしますと、随分有声音がでてきました。わたしは一寸郷里のことばをきいてゐるやうな感じがしたわけです。普通ああいふのをズーズー弁といふわけでせう。普通の一般的な本では、ズーズー弁は東北とか出雲といふわけですね。出雲には、わたしも今年の1月に一寸参りましたが、そば屋のところに「わたしあなたのイヅモソバ」とかいてあるんです。堂々とかいてあります。<出雲そば>とイヅモ（いつも）そばとのかけことばなんでせうが、現実にはかけことばといふよりも、松江のことばそのものなんですね。

そのやうなものが、開田村の録音の中にもありまして、ズーズー弁のやうなこととか、アクセントのことなども、見様によってはとても小さいかもしれませんが、それはまたマクロにつながってくる。言語研究といふのは、マクロの問題とミクロの問題とがたえずついて廻るものではないか。さういふ全体的のものは、音声でいひますと、intonationといったやうなことで考えていいんぢゃないでせうか。

先月、11月の13・14日に、さきほど申しました国語学会のただ一つの支部、中国四国支部といふのがあります。この大会が山口大学の人文学部でありました。わたしも出席するやうにとのことで出席いたしました。13日の夜に懇親会がありまして、わたしの隣が藤原与一さんでした。

わたしは藤原さんに「ことばといふのは、すべて全体の問題ではありませんか。意味のこともすべて全体から考へるべきではありませんか」と、ご馳走そっちのけにして、そばに大先生がをられるものですから、色々とおたづねしました。藤原さんは「全く同感です。ただわたしはあなたのやうに、intonationといふことばは使はないで<ことば調子>といってます」といはれました。

intonationと<ことば調子>とで、いひ方はちがひますが、中味は同じぢゃありませんかと遠慮なく申上げたことでした。

わたしたちが色々な方と話をしてゐまして、どこの人なのか、なんとなく分るといふことがあります。また何々弁といふのは、例のSaussure流にいへばlangueだといはれる方もあります。いひかへますと、何々弁といふのはその方言全体をさすいひ方ではないか、

そのやうなところに、intonationと「意味」との関係があるのではないかと思ひます。

さきほどのオバンデスでなくとも、サヨナラとかコンバンワ、あるいはアリガト、関西流のオーキニといふいひ方も採集したわけではありませんが、何十通りか何百通りかのいひ方があるやうです。それは、音声のちがひもありますが、いってゐる人の気持の問題がありますね。

本当にサヨナラといってゐる場合、事務的にいってゐる場合、また親しい人にいってゐる場合に対して、一寸道であってサヨナラと簡単にいってる場合など色々です。アリガトーとかオーキニもさうだと思ひます。わたしはさういふことがすべて「意味」に直結すると思ふわけです。

このやうなことは、ことばの「意味」が無限にあるといふこととつながります。そのやうな、「意味」といふことが無限にあるといったやうなことは、今までの<釈>とか<義>の世界ではあまり言ってないわけですね。一が何々、二が何々としるしてあるだけなのです。

そのやうなことを何気なく見ますと、これには十の意味がある、これには二十の意味があるとだけうけとってしまひます。無限の中の十であり、無限の中の二十だといふ風にはうけとりません。ですから<釈>とか<義>といふのは、考へ直してみることが時には必要だと思ひます。

2　辞書的意味とcontextからの<意味>

<意味>といひますのは、辞書的意味といふことと、contextといひますか、前後関係からの<意味>と勿論分けられます。<辞書的意味>といふことばは屢々使はれます。これが分ったやうで中々分りません。辞書に書いてあるやうな意味、辞書にしるしてあるやうな意味、一体その本体は何なのかよく分りません。

一寸例をあげますと、大分前に<来る>といふことばをある必要から調べました。わたしは辞書を引くときに、必ずといつてもよいほど、まず中学生用・高校生用をざっとみます。30か40位ですから、1冊1000円位として3万か4万で全部買へるわけです。それをそばにおいて、かたっぱしから引いてみます。それをすべてご紹介するのは大変ですが、一つ二つあげてみますと「向ふから人がクル」「あいつのいふことは頭にクル」「あいつとキたらしようがない」などといふのがあります。そんな風にずっと「来る」を調べ、一つ一つをカードにとっていきますと、ちがふ意味とうけとれるのが大体30位になりました。

そこでまた一つ一つの辞書にもどってみますと、大体10通り位はあげてありますが、全体をあげてあるといふのはなかったやうです。全体から見ますと「来る」といふことばには30通り位の意味があるといふことは、一見非常に多いやうに感ずるわけです。しかし、このことは現代の辞書のいわば<異なり解釈>、こんな用語はあまり使ひませんが、その

経緯ですから、それですべて尽くしたといふことにはなりません。かうしたことを見ますと、やはりどこかに辞書には不備がある。不備といふことばでいけなければ、どこかに限界があるといふことがいへさうです。

と申しますのは、辞書といふのは、見出し語があって、意味が書いてあります。その一つ一つの見出しが一人歩きといひませうか、一語文といふことばもあるさうですが、一語だけで使ふといふことは勿論ありませう。晴れとか雨とか風とか雪とかいふことはありませうが、一語で文を作るといひましても、必ずその前後のこと、前後関係のことがありますから、contextを相当広く考へませんと、一寸理解には程遠いわけですね。たとへば空なら空といふ一語で使へるといひましても、どんな場合に一語で使へるのかといふことをよく見なければいけないと思ひます。

さういふ点では、すでに中々いい本があります。助詞・助動詞関係では永野賢さんのもの、動詞では宮島達夫さんのもの、形容詞では西尾寅弥さんのものなどです（いづれも国立国語研究所報告）。かういふものは、いづれもハンコで押したやうに＜意味・用法の記述的研究＞とあります。申すまでもありませんが、色々の用例を記述しまして、その記述したものを示し、その記述に基いての意味・用法を示してあるわけです。ところが同じ国立国語研究所でも『分類語彙表』の意味となりますと、これは一寸違ふやうです。

『分類語彙表』を作られたのは、実際には林大さんときいてゐますが、この本の前書きを見ますと、一つ一つの項目の語について、＜同義類義の関係であって、自由連想による語群ではない＞とあります。これは一見簡単なことのやうですが、かういふ問題を考へまときには、実は大事なところだと思ひます。つまり、自由連想の語群にはtouchしない、同義の領域についてはあげてあるといふことになります。

同義類義といふことをもう少しかみくだいて申しますと、同じ文脈の同じ地位、あるいはまた転換された文脈の相当する地位に現れることが許されるかぎりのもの、といふことにあるやうです。その限度といひますのは、林大さんもお書きになってをられますやうに、広狭さまざまな取り方があります。ですから類義といふことの範囲といふのは分ったやうで、中々分らないんですね。非常に伸縮自在なのが類義の範囲だと思ひます。

例の『日本言語地図』などもよりどころにされてゐる、徳川宗賢さんと宮島達夫さんとの『類義語辞典』といふのがありまして、はじめにご紹介しました山田忠雄君の『近代国語辞書の歩み』では「破天荒な著述」といふ、ものすごいほめことばでしるしてあります。小学館の『日本国語大辞典』の方は、まづ書名が気にくはない、語呂がわるいといふところから始まって、コテンコテンなんですが。

この徳川さんと宮島さんとの場合でも、類義の範囲といふのは非常にむづかしい。ですから『分類語彙表』でも、そのせゐかどうかは存じませんが、あらゆる文脈について検討した結果を示すものではないといふことを断ってゐます。勿論あらゆる文脈を検討するといふのは大変困難でございまして、まさに無限ですが、無限だから少くとも手をつけない

といふのでは困るともいへます。わたしたちのやってゐますことは、たえず無限にぶつかってゐるやうなものともいへます。

大分前に、樺島忠夫さんが「理解の構造――巨視的意味論の試み――」といふ論文を『国語国文』に発表されたことがあります。その後、『日本の言語学』第5巻に収められましたから、『日本の言語学』の編集の方も、樺島さんの「理解の構造」に相当ひかれたのだらうと思ひます。わたしもひかれた1人ですが、無限といふことを考へる上で、その無限に如何に対処するかの一つの方向を樺島さんの論文から学んだ思ひです。

さきほどにもどりますと、一体<自由連想の語群ではない>といふことはどういふことになるのでせうか。それは、<意味>を辞書的意味から考へていくのか、またはたえず、contextから考へるのかといふことにもなりませう。勿論辞書といふものは便利ですから、たえずひくわけですが、わたしたちが何かものを考へるときには、辞書から始まるわけではありません。そこで、また別の角度から考へてみたいと思ひます。

3　意味と語形（form）

日本語の意味を考へていきます上で、常に離れないものの一つに漢字があります。この漢字には、形・語形があります。今、何故こんなことを申すかといひますと、このごろはcomputer時代といふわけで、ことばもどんどん分類して、機械にかけるわけです。そして、その分類を整理していきます。国研などではアルバイトまで使って、どんどん整理します。そのときに、形の上だけでどんどん整理していくといふことは、能率の上からいひましてもやり易いわけです。

ただ、ここで形と申しますのは、必ずしも漢字とか仮名といった書くものだけではなくて、音声の上での形といふこともあります。これから同音語といふ大きな問題が勿論あるわけです。ところが、実際はどうかといひますと、形が同じ、あるいは同音であっても、<意味>はちがふといふことが沢山あります。同音といふことは、中国語の場合などには随分あります。

同形であっても、<意味>の全然ちがふことがあり、また同形でも時間的な問題で<意味>のちがふことがあります。このやうな問題は多いわけです。そのことは、わたしたちのことばの研究の上での、現実の研究と過去の研究といふこととも当然つながってきます。また同時に、ことばの変遷とか、ことばの<意味>の変遷ともつながってきます。

現在行なはれてゐますcomputerを使っての語彙調査となりますと、扱ふ語数が何万とか何十万、時には何百万といふことにもなりますから、sampleだけでも相当の数になります。さうすると、どうしてもある程度同形処理といふことをやってるわけですね。そこに色々と問題があるやうに思はれます。さうしたことから機械力の限界ともいふべきことを感じたこともありました。

同形か否かといふことに拘らず、contextを含めての記述こそがdataそのものと考へる

角度からしますと、同形のものに対しては、その記述のあり方がむしろ一層 severeであるべきだとも考へてをります。

一つの例を申し上げますと、ポルトガル式ローマ字でかかれたイソホのはじめの方に、cugaiといふのがあります。これは<公界>をあてると考へられます。このことばは、鎌倉のはじめの禅の僧堂ではじまったやうです。これは、たとへば便所に行ったあとに手をふくきれ、手巾といひませうか。それが個人のものでなく、みんなで使ふときに<公界の手巾>といふ風にいひます。『正法眼蔵』にもみえることです。

この<公界>は幾変転をかさねました。連歌の頃になりますと<公界物>といふことばがあり、公卿の世界でも使はれた形跡があります。形は同じですが、<意味>が変っていきます。近世もずっとありますが、明治以後はほとんど使はれませんし、勿論現在も使ひません。ことばの歴史の中には、大昔から今もずっと使ってゐるのもありますが、この<公界>のやうに、ある時期に始まって、ある時期に終ってしまふといふのも時々あります。かういふものが、取り扱ひの上では厄介なことになります。しかも、そのある時期からある時期の間に、形は変りませんが、使ひ方といひますか、<意味>がどんどん変っていくもののあることは、厄介ですが、相当の注意を要すると申せませう。

4　<意味>と<意味の分類>――<意味>の根本との関連――

<意味>といふこと、<意味の世界>といふことを考へます上で、また『爾雅』に逆もどりしますと、はじめの釈詁・釈言・釈訓は別としますと、あとは16になります。これは16分類と見ることができます。

天・地・丘・山・水はまさに自然そのもの、草・木・蟲・魚・鳥・獣・畜も自然ですが、人間の生活に結びつくもの、あるいは生活に不可欠のものといへます。親・宮・器・楽では、<親>は人間関係、<宮>は住居と見ることができます。<楽>は中国のことを考へますには、とても大変なことと考へてゐます。軽く音楽位に考へましたならば、とても軽いものではないといふことが、中国のことを調べれば調べるほど分ってくるやうです。この16の分類は大きく三つに分類できると考へてゐます。さうした3分類のことは東洋だけではありません。

1952年のBerlin Akademie-Verlagで, Rudolf Hallig und Walther von WartburgのBegriffssystem als Grundlage für die Lexicographieといふ本があります。

この本は辞書といったことに限らず、ことばを考へる土台にふれてゐるといふ感じです。Begriffは申すまでもありませんが、日本語なら<概念>といふことになりませう。その<概念>、いはば人間の思考の System <組織>といふものを、Lexicographie の上で、字書・索引、更に英語でいふconcordanceのやうなものまで含めていいと思ひますが、その土台すなはちGrundにlagenするものとしての<概念>を考へてゐるわけです。いはば、その思考の組織といふことを示してゐるわけです。それはまづ大きく3分類して

あります。その大分類（Hauptteil）以下、書名とともにドイツ語ですが、中に示されてゐるのはフランス語です。書名がドイツ語のフランス語の分類といふことになります。

そのHauptteilは、

A. l'univers B. l'homme C. l'homme et l'univers

でありまして、ここに、まさにBegriffssystemの根柢があるといへます。すなはち、まづ自然、宇宙といったことが考へられます。そして人間、三つ目が自然と人間とのかかはりといふことになりませう。このあとAbschnitt（いはば中分類）が10、そしてUnter-abschnittが61となります。

自然といっても、つまりは人間が考へる自然なんですね。人間が自然について、どこまで分りうるのか分りません。現在は宇宙科学が発達してゐるさうですが、どなたかのことばでは、今分ってゐる宇宙は実際の宇宙の何万分の一か、何億分の一だといふことなさです。さうすると一体宇宙といふのは何なのかさっぱり分りませんが、とにかく、人間は、人間の考へる自然の中で生活してゐます。

昨晩お世話になった淵の坊の部屋に「明らかなること水の如し」といふ額がございました。この水がなければ話になりません。水と人間、水あっての人間といふことになりませう。ところが、その水も多すぎると大変なことになりますね。あの実朝の「時によりすぐれば民の歎きあり八大龍王雨やめたまへ」といふ歌が金槐集にありますやうに、自然の恵みが多すぎると、今度は災害になってしまひます。

ですから、自然の中で利用できる限度があります。それを思ひますと、自然といふものは測り知れないものだといふことになります。さうしたところに、わたしたち人間の生活があります。したがって、人間・自然、そのかかはりの中から、Begriffssystemのスタートがあると考へられます。<意味>といふことも、そのやうな根元から考へなければいけないのではないでせうか。

したがって、さうした角度から、わたしたちは改めて中国の類書なり、また日本の分類体辞書を考へなければいけないと思ひます。今あまりこまかいことは申せませんが、すこし辞書の歴史などを調べますと、さう大昔でなくとも、たとへば『色葉字類抄』あたりからでもいいのですが、ほとんど<天地>とか<乾坤>から始まるわけですね。そして色々な部門があって、あとは<言語>とか<言辞>とか<言語進退>といふ風になります。そして、またそれらの部門の排列に一つの流れがあります。この排列の問題はまへに『国語学研究』にしるしたことがありますので、ここではくりかへしませんが、さういったものが<意味>の骨組みとか骨格となり、そして、わたしたちの生活・思考の問題と直結します。そして、その問題は洋の東西を問はず、人間の問題であるといふことができませう。

5　ことばの<相対性・経験性>

方向を一寸かへまして、ことばの<相対性・経験性>といふことにつき、すこし申上げ

たいと思ひます。松本の方でせうか、『ああ野麦峠』といふ小説がありました。たしか山本さんといふ方で、映画館では見ませんでしたが、テレビで映画を見て大変感動いたしました。そのあと、ＮＨＫの教育テレビに「この人と語る」といふ番組がありまして、山本さんのお話をききました。

それをきいてゐましたら、30分のうちの真中あたりで、はっと胸をつかれたことがありました。それは、丁度わたしの考へてゐたことをいって下さったことによります。といひますのは、その山本さんは「自分は経験したこと以外はかかない」といはれたのです。つまり、経験しないことはかかない、経験したこと以外はかかないといふことを、いってをられました。このことは、わたしの考へてゐた＜ことばの経験性＞と丁度ぶつかったことになります。

一方の＜相対性＞といひますのは、この＜経験性＞と非常に関係があります。したがって、＜相対性＞といふのは、時により＜経験性＞とおきかへることも可能なわけです。

先月の末ごろ、岡山のノートルダム清心女子大学で、推薦入試の面接とか小論文をかいてもらふといふことがありました。驚きましたのは、志願者が北海道から沖縄まで全国からやってくるんです。これは中々大変な大学だと驚きました。百数十人の高校３年生です。終りましてから、色々な方の話をきいてゐますと、きいてゐてをかしくなりました。北海道・東北から来た方は＜岡山はアタタカイ、アタタカイ＞といって、喜んでゐたといふんです。九州・沖縄の方は＜サムイ、サムイ＞といって、ふるへてゐたといふのです。同じ場所に集まった人が、片っぽうの人はアタタカイ、アタタカイ、片っぽうの人はサムイ、サムイといふわけです。

かういふことから、わたしたちは、ことばを使ひますときに、アタタカイとかサムイとかのことだけでなく、色々なことについて、大抵はやはりそれまでの経験でものをいってゐると思ふんです。

こどもなどでも、何も経験しないことについて、わたしも何人かこどもがをりますが、こどもははじめは、たとへば＜痛イ＞といふやうなことが分りません。あるいは＜オカネ＞といふことも分りません。

うちの坊主がごく小さいときに、一寸姿が見えなくなりました。それが、お店のまへにさびしさうに坐ってゐるんですね。母親がやっと見つけまして、そばに行きましたら「お店の人なんにもくれないよ」といって、坐ってゐるといふわけです。つまり、オカネを出して買ふってことを経験してなかったわけです。お店に行けば、何かくれると思って、長いこと坐ってゐまして、やっと発見されたわけですが、経験しないと中々分りません。

かうしたことから申しましても、ことばの＜意味＞といふことを考へる上で、個人の経験は大いに影響してゐると思ひます。経験が何もありませんと、実感が湧いてきません。このことは辞書の＜語釈＞などでも、恐らく人によってつかみ易い方とつかみにくい方とがあるのではないかと考へられます。

一方、事柄によりましては、経験したものあるいは経験しうるものと、中々経験できないものとのちがひがありませう。殊に方言などの場合は、さういふことがあると思ひます。わたしの郷里の仙台のことばなんかでも、どうにも翻訳できないことがあります。今、例の文化庁の仕事の担当者などはどうやって翻訳するのかなと思ひまして、わたしは固唾をのんで、早く活字になるのを待ってゐるわけです。

たとへば、既製服なんか着ますと、からだにどっかあはないんですね。着れるんですが、どっか何かをかしい。そんなとき「エズイ、エズイ」っていふんですね。それを「どうもからだにぴったりしないやうな気持がする」と訳しましても、全然その感じを説明できません。やはり、これはその感じの経験と、そのエズイといふことばとの味、その関係がいはゆるnativeでないと分らないといふことでせうか。

さきほどのサムイ・アタタカイといふ<相対性>だけのことのほかにも、英語でもよくありますが、badに対して、あるいはbadといふかはりに、not very goodといふいひ方があります。affirmativeのいひ方に対して、negativeをわざわざ使ふことがあります。また日本語のいひ方の中では「アリマスカ」といふよりも「アリマセンカ」とか「ゴザイマショーカ」のやうな遠廻しのいひ方もあります。肯定形に対して否定形とか遠廻しのいひ方の方がいいやうに思ふといふこともあります。

かうしたこと、相対性・経験性のことは、色々な場面から思ひますと、語法全体・表現全体にもかかはってくることになります。したがって、肯定に対する否定、また遠廻しのいひ方なども、長い経験からの産物とも考へられませう。それらのことがすべて、ことばの<意味>にかかはってくる思ひがいたすわけです。

6　<意味>の<分らない>といふこと

さきほど、ご発表のありました杜甫の「草木深し」のことにもつながることですが、やはり中国の唐に李賀といふ人がをりました。この方は惜しいことに大変若くしてなくなりましたが、わたしは唐の詩人の中でのひかれる1人と思ってゐます。この李賀の詩について、今福井医科大でやってをります。世の中には、中国語の専門の方も沢山をられますから、李賀の詩をよみますのに、中国語のままではいささか領土妨碍かとも思ひました。訓読の方ですと、たとへば『中国詩人選集』などがあり、これはよめば大体分ります。

そこでJ. D. FrodshamのThe Poems of Li Ho 791—817といふ本を選びました。これは10年ほど前の1970年にOxford University Pressで出たものです。福井大学に芦立一郎君といふ中国文学の専門家がをられますが、この方は学生時代に李賀を随分勉強してをられます。芦立君にこのOxfordの本を見せましたら、まだ読んでないといひますので、ぢゃ専門家が読んでゐないなら、この本をとりあげようと考へました。芦立君が仮にききに来られても、読んでない本ですから、勝手をいっても大丈夫とも思ひました。そのFrodshamの本を講義ではなくて、学生と一しょに読んでゐるところです。

その芦立君が、先日福井の漢文学の会で李賀の詩についての発表をされましたが、その中に「深」といふことがありました。そのことにつき、すこし同君と話をいたしました。日本なら「深」にはシン・ジンの音があり、訓よみならフカイですね。英語ではすべてといっていいほどdeepと訳してゐます。

芦立君の話では、日本語のフカイと中国語でのシンとは意味が違ふといふんです。勿論英語のdeepともちがふといひます。それでわたしは「シンの方は君分るのかな」ときいたわけですが、彼は「実はなんにも分らない」といふ返事でした。

わたしは全く<分らない>ことだらけですが、彼もわたしと同じやうに「分らない」の連発でした。中国文学の李賀の専門家も分らないといふことが分ったわけですから、まあ安心はいたしましたが。

かうしたことは、一つ一つのことばの味、<意味>について、表現者つまり作家とか話手の真意を一体どこまでくみとれるかといふ根本問題につながってきます。特に<意味>のことだけに限るわけではないのですが、ことばの研究の上では、特に<意味>が、調べたり考へたりすればするほど分らなくなります。

学問といふのは、何事でも調べれば調べるほど分らなくなることを、自分で分るやうになることかもしれません。

<追記>　12月19日にお話しいたしましたときの録音を、青木千代吉さんがそのまま文字化され、テープとともにわたしのところに送って下さいました。原稿用紙55枚です。それを40枚ほどにするやうにとのことで、録音を２、３度ききましてから、青木さんの原稿によりつつ、この原稿をしたためた次第です。

結果はご覧のやうに、甚だとりとめのない感じですが、わたしとしては一つの収穫がありました。

それは録音をきいてゐると、そばにゐた家内もおもしろいといってくれました。しかし青木さんの御労作の文字化を見ていきますと、あまりおもしろくありません。

話しことばをそのまま文字にしますと、話しことばの調子・間、あるいは無駄が一切なくなって、文字通り文字だけになります。

スープを作って、スープのあとのカスにぶつかった思ひです。馬瀬さん、青木さんのおいひつけのまま、文字通りの拙稿をしたためました。恐縮のほかありません。

（1983年１月27日夕草）